

ウィメン・アット・ワーク
Women at work!

H i n a k o ♂ D a i c h i

真砂耀瑚

Yoko Maago



エタニティ文庫

C o n t e n t s

Women at work !	5
The brilliant lovers	233
A dream come true	263
十年経っても……幸せです！	287

Women at work !

「ほら陽南子、あれを見てごらん」

ほんやりとした記憶の中、そこにいたのはまだ幼い自分と、在りし日の父親だった。父が指さす彼方には、真つ赤な夕日に浮かぶ建設中の高層ビルの鉄骨があった。

「おっきいね」

「そうだろう？ 父さんたちはあれを作っているんだ」

その時の父の誇らしげな顔を、今はもうはつきりと思いつき出すことができないのが悲しい。「きつと眺めがいいぞ。空を飛んでいるみたいなきぶんになるかもしれないな」

「とりさんのように？」

両手を広げ、鳥の様子を真似る娘を、父は笑いながら力強い腕で抱き上げた。

「いつか、あのビルができたなら、母さんと一緒に三人で、一番上まで行ってみような」

「うん、ゆびきりげんまん」

「ああ、ゆびきりげんまん。約束だ……」

そう言った父が、その約束を果たすことはなかった。

建設現場の、汗と埃と資材の放つ独特の匂いに囲まれたこの場所に立つと、今もあの日の思い出が蘇ってくる。

女だてらに、手がけた建物の完成を目にする高揚感を追い求めるのは、父から受け継いだ血のなせる業なのだろうか。

ここが私の居るべき場所。

建設中のミューズシテイの、高く組み上げられた鉄骨を見上げながら、陽南子は強くそう思う。

今の世の中、女だからといってできないことなど何もない。

男に負けない仕事も情熱的な恋も、いつか絶対この手で掴み取ってやる。

異陽南子、二十九歳。

彼女の人生をかけた恋と冒険が今、この現場から始まる。

「そんなことも知らないで、よく建設会社なんてやってられるな」

工事現場の騒音の中でも、はつきりと聞こえるがなり声。

何か言い返す声は凄まじい轟音にかき消されているのに、その声は不思議とよく通り、耳に届いた。

ここは、朝倉建設が推進するプロジェクトの建設現場。

副都心の一角に、地上三十八階建てのツインタワー型オフィスビルと複合型商業施設、そしてそれらと同じ敷地内に居住用マンションをも建設する大規模な再開発事業だ。

ようやく用地買収が完了し、着工したのは昨年秋。

それから数ヶ月、今では土台の基礎工事が終わり、地上部分の骨組み工事が始まっていた。

その日、朝倉建設社長である朝倉大地は、その進捗状況を確認するために、自ら現場に出向いていた。もちろん抜き打ちだ。

現場の安全管理、周囲の住民や通行人への配慮、現場と周辺清掃管理の具合等々、施工主として注意義務が課せられている事項は数多ある。だが、それらを確認するため、あらかじめ視察の予告をしておく、的確な現場評価ができないことがある。視察に来ることを知った現場の作業員が、その時だけ表面的に綺麗に片付けてしまうからだ。しかし、目が届かない場所があればそこから不慮の事故や労働災害が起こる危険性がある。そのため大地は時々予告なしに現場に出向き、ありのままの状態を確認するようにしていた。

「その格好で現場を見て歩くって？ 百歩譲ってメットはここにあるのを使えばいい。

けど、工具や鉄骨、金具や建材が地面にころころしている場所を革靴で歩くのは無謀だ」
 どうやらプレハブ小屋の入口あたりで言い争っているのは、今日の視察に同行した秘書の小嶋と現場の人間らしい。秘書は何かを言い返しているようだが、何を話しているのかはまったく聞こえてこなかった。

大地は腕時計を確認しながらため息をついた。

次の予定まであと三十分もない。ただでさえ前の会合が長引いたせいで、時間がおしているのだ。

当初、ここには大地一人で来る予定だった。現場に入れば監督に案内を頼めばよく、部下を帯同する必要はない。だが、秘書室は常日頃からそんな彼の単独行動をよくは思

つておらず、誰かを同行させようと言ってきた。無論、その時は不要だと突っぱねたのだが、今朝になって、この視察前にあった会合に一緒に出席した秘書を会社まで送り届ける時間の余裕がないことがわかった。仕方なく同行を許可したというのに、本来大地の業務をスムーズに進めることが役割の彼がトラブルを起こすなど、本末転倒もいいところだ。

大地は座っていたパイプ椅子から立ち上がると、入口の方へと歩み寄り、秘書を一喝する。

「こんなところで一体何をもめているんだ。小嶋、もう時間がないぞ」

そして次に小嶋と言いつ争っていた相手を見る。そこにいたのは作業服姿の男だった。身長は一七〇センチちよつとくらい、男としては中肉中背といったところか。埃だらけの作業服に安全靴という、現場ではよく見かける出立だ。

だが、特徴的なのは、深めに被ったヘルメットの後ろから出ている長い髪の毛だった。着ている作業服と同じように埃を被って白くなっていたが、その長さが普通ではない。さつちりと一本の三つ編みにして、腰のあたりまで垂れ下がっていたのだ。

埃だらけの現場の仕事で、この長さでは手入れも大変だろうな、と驚きを感じながら、大地はその男に話しかけた。

「君がここの管理者か？ 悪いが時間がないんだ。これからすぐに現場を案内してもら

えないか」

「ですから社長、こいつはそれを拒否しているんですよ」

小嶋が訴えるように大地を見た。

「たかがヘルメットや靴の一つや二つで……」

「素人はすつこんでな！」

作業服の男はハスキーな声にドスを利かせてその言葉を遮った。

その迫力に、対峙していた小嶋だけでなく、大地までもが気圧されたほどだ。

「装備を忘るのは怪我の元。現場に入る時には、たとえ社長だろうが会長だろうが、ヘルメット着用は鉄則だ。それに敷いてある鉄板は滑りやすいし、機材もあちこちに転がっている。革靴なんかで歩いた日には滑って転んで大怪我をすることにもなりかねない。つてことが、どうしてわからないんだ？ それに、特に今日は朝から納入トラブルがあつて、こつちもてんでこ舞いしているつていうのに、突然呼びつけて『これからすぐに現場を案内しろ』だと？ そんな暇が一体どこにあるつて言うんだ？」

「作業員風情が、施工主である朝倉社長に対してその言い方は失礼だろう」

憤慨する秘書を見ながら、大地は再びため息をついた。

そんなことがあったのなら、確かにこの男がおかんむりなのも仕方がない。小嶋のこゝとだから、おそらく高飛車な態度で案内を言い付けて事態を拗らせたのだろう。

「小嶋、もういい。君は下がっていきなさい」

「しかし、社長……」

「いいから下がれ」

大地は秘書にそう言うのと、自ら男の前に進み出た。

「突然で申し訳なかった。私は朝倉建設の社長、朝倉大地だ。今日は抜き打ちで現場の視察をするためにここに立ち寄った。取り込み中とは知らなかったんだ」

名刺を差し出すと、相手は手袋を外した。現れたのは考えていたような無骨な手ではなく、ほっそりとした綺麗な手だった。その長い指が名刺をスマートな所作で受け取る。「普段の散らかり具合を見たいという目的もあるでしょうから、本来なら抜き打ちでも構いません。ただ、今日はあまりにもタイミングが悪すぎる。それに最低限、装備だけはきちんとできてください。そうでないと、こちらとしても責任が持てない」

そう言うと、相手はふと気づいたように「失礼」と軽く会釈してヘルメットを脱いだ。汗で額に張り付いた前髪、巻いたタオルの間から見える首筋が灰色の埃にまみれている。しかし、大地が驚いたのはそんなものではなく、そこから覗いた顔だった。

「君、女だったのか……?」

思わず無礼な言葉が口をつく。

顔に化粧つ気はなく、束ねた髪の毛はヘルメットを被っていたせいでポサポサだが、

見たところまだ三十歳にはなっていないだろうという感じの若い女性だった。

「男だと思っていました?」

大地にじっと見つめられた彼、もとい彼女が苦笑いを浮かべた。

「い、いや、失礼した。まさか女性が現場の監督をしているとは思わなかったのだから、確かに。まあ、こんなナリだし、声も塵埃でやられて、がらがらになってしまったから、そう思われても仕方がないかな。特に今はとび職人が入っていて、いつもより余計に上に向かつて声を張り上げることが多いし。本来なら職人たちは、じいさん、いえ、親方が仕切っているんですが、先日来、調子を崩してしまってますね。今はウチの作業員と職人の両方を私が見ているんです」

現在この現場には通常の建設作業員の他に、異組が入っていると聞いている。彼らは高所作業が得意な、今では数少なくなった「とび」を専門とする職人たちだ。

中でも親方の異源之助は、この世界では右に出るものはいないと言われる伝説的な職人だった。さらに自ら職人仲間を率いて、六本木、台場あたりの多くの高層ビルの建設に携わったとび職界の重鎮だ。

数年前からは高齢もあつて、現場で指揮を執ることに専念しているようだが、今でも彼の下で働く職人集団の仕事の評価はどこで聞いても超一流とのことだった。

「申し訳ないですが、言われた時間内に現場を回りきるのには難しい。今日のところはと

りあえず、進捗状況の説明をさせてもらいますから、中に入ってください」
 大地が先ほどまで掛けていた椅子に再び腰を下ろすと、彼女はポータブル式の保温庫から缶に入ったお茶を取り出した。

「すみませんね社長、こんなものしかなくて。ここは埃がすごいから、湯呑みやコップをそこらに置いておけなくて」

彼女はそう言いながら、デスクの引き出しを開けて中から名刺を取り出すと、両手を添えて彼に差し出した。

「あ、申し遅れましたが、私は稲武工務店の社員の巽陽南子です。現在この現場の監督代行をしています。よろしくお願いします」

「巽？ ということは、もしかすると巽組の親方の身内か何かか？」

大地は受け取った名刺と目の前の女性を交互に見る。

「ええ。親方は……巽源之助は私の祖父です」

「それでは君が巽組の跡継ぎということか」

「さあ、それはなんとも言えません」

なぜか渋い顔をしてお茶を濁しながら、彼女は簡易テーブルの上に、凶面を広げた。

重要なポイントを指し示しながらの彼女の状況説明は、驚くほどの確だった。こちらからの細かな質問にも動じることなく、瞬時に無駄のない答えが返ってくる。

それだけ見ても、この現場で監督を代行する巽陽南子は、女性ながらかなり有能な人物であることがうかがえた。

「なるほど。では、この部分だけが遅れているということだな」

彼女の説明では、注文した部材が品番違いで納品されてしまい、まだ取りかかれていない箇所が幾つかあるとのことだった。その部材が今日再納入されるはずだったのだが、土壇場で再び品番違いが発覚して、午前の工事が完全に止まってしまったというのだ。

「こんなことは珍しいですね。納入業者は小さい個人経営の会社だけど、元請が……御社が懇意にしている馴染みらしいし、実績もあると聞いているのに、同じミスを二度もやらかすなんて、信じられない」

彼女は首に巻いていたタオルを外すと額の汗を拭った。

真冬に近い気温だというのに、彼女は噴き出すような汗をかいている。このプレハブの中はストーブが焚かれていて外に比べるとかなり暖かい。吹きさらしの現場に馴染んでいる身体には、それが暑く感じられるようだった。

「とにかく、これ以上の遅れを出さないように、手順を変えてでも工期を守るつもりです。そちらも、もしかた視察する機会があるならば、直前でもよいので一度連絡を入れていただきたい。次回は可能な限りご要望にお応えします」

彼女はそう言うのと、にこりと笑った。

しとやかさとは縁のない、飾らない笑顔。しかしそれには真夏の太陽に向かつて咲く、大輪の向日葵ひまわりのような快活さがあった。

『なんて大らかに笑うことができる女なんだろう』

それが、大地が巽陽南子という女性を意識した、最初の瞬間だった。

2

その日の夕方、朝倉本社に戻った大地は、すぐに秘書の高野たかのを呼んだ。

「副社長、お呼びでしょうか？」

大地は現在、朝倉建設の社長であると同時に、日本有数の商社であり、複合企業でもある、総合商社朝倉の副社長という地位にあった。

ただ、肩書こそ未だ副社長だが、体調を崩してビジネスの第一線から退いている父親に代わり、ここ数年間の会社経営はすべて彼が取り仕切ってきたと言っても過言ではない。

「入ってくれ」

「失礼します」

今部屋に入ってきた高野は大地直属の部下であり、本社秘書室次長。秘書の序列から

すれば上から二番目にあたる。まだ先代の時からの古株社員が残っているためトップにはなっていないが、実質的に秘書室を取り仕切っている高野は、影の室長とも呼ばれている有能な男だ。

数いる側近たちの中でも、大地や弟の嶺河りょうがが一番信頼をおいており、あまり公にしたくないことや、プライベートが絡むような場合は、人を介さず直接彼に用件を頼むことが多い。

「ミューズシティの工事関係者の個人情報ですか？」

ミューズシティとは、件の建設中のビル群の総称だ。棟やブロック毎に呼称が付いているが、施設全体としては関係者からこう呼ばれている。

大地の話聞いた高野は「ふむ」と口をへの字に曲げた。

彼の手腕をもってすれば情報を集めることなど容易なはずだが、本来これは朝倉建設の秘書がするべきことではないかと考えているようだった。

高野はあまり朝倉建設の秘書を高く買っていない。高野に言わせると、彼らは縄張り意識が強すぎて、本社とは常に一線を画してあからさまな対抗意識を燃やす嫌いがあるという。特に本社から弾き出される形で転籍させられた小嶋とその一派は、何かあるとすぐに古巣であるこちらを目の敵にしてくる。

聞くところによると、以前高野が良かれと思っただけで建設側から「越権行為だ」

ときついクレームを受けたことがあるらしい。それ以来、彼が朝倉建設の秘書のテリトリには立ち入らないようにしていることは大地も知っていた。

「これならば『あちら』の小嶋君でもできそうな気がしますが」

それを聞いた大地が渋い顔をする。

「それができないから君に頼んでいるんだ。小嶋が現場でちょっとやらかしてくれてね」大地から今日の一件を聞いた高野は、呆れたような表情でこめかみを擦った。

彼にしてみれば、秘書たるもの、主がスケジュールをスムーズにこなせるよう万全のサポートをするのが鉄則だ。

もちろん立场上、クレームの矢面に立たされることも多く、嫌なことや腹の立つこともあるのは確かだ。だが、それを抑えて物事を順調に進めてこそ参謀としての評価も上がるといふのに、自分が先走ってトラブルを引き起こし、挙句の果てに予定を遅らせるなど言語道断というものだろう。

「ということで、内密に。よろしく頼む」

副社長から渡されたメモを渋々受け取った高野は「承知いたしました」と言葉を残し、部屋を出ていった。

その姿を目の端に捉えながら、大地は次のスケジュールをこなすべく電話を手を取ったのだった。

翌日、彼が入社してきた時には、すでにオフィスの机の上に、高野が用意した報告書が置かれていた。大地はそれを手に取り、満足げに頷く。

やはり高野。仕事をそつなくこなすし、何より動きが早い。

後でゆっくり読もうと思いつつも、何気なく捲ったページの記述に目を走らせた彼は、その変わった経歴に思わず唖った。

「純麗女学院高校卒？」

いわずと知れた、戦前から続く関東屈指のお嬢様学校だ。

家柄はもちろんのこと、家庭の財政状況、本人の素行、学力、すべてが完璧に揃わないと入学できないとされるミッション系名門女子校で、ほぼ一〇〇%が幼稚園からエスカレーターで進級してくることで知られている。もちろん大学まで一貫教育を受けることが可能で、そこを出れば先々縁談に困ることはないという噂だ。

昨日のあの風貌と、クラシカルで清楚な純麗女学院の制服がどうしても頭の中で結びつかない。

「どう見ても、一七〇センチは超えてたよなあ」

失礼な言い草だが、体型的には、セーラー服よりガクランでも着ていた方がよほどしっくりくる感じだった。

そして読み進んだ大地がさらに驚いたのは、彼女がその高校からストリートで有名国立大に進んでいることだ。そこで建築を学び、大学を出る時には二級建築士の資格を取っている。

その後、帰京して就職、そこで一級建築士資格を取得したとあるが、その就職先というのが、今回朝倉が工事を下請けに出したジョイント・ベンチャーの一つである、稲武工務店だった。

「妙だな」

彼女は本来なら現場に出るような立場にはない。どちらかというホワイトカラーの、事務所で図面をひくことを仕事にしている職種のはずだ。

それに、いくら工務店の社員とはいええ、そんな人間に「とび」のような職人たちが、簡単に現場を仕切らせるとは到底思えなかった。ましてや今現在、異組をまとめているといえながらも、彼女の籍は稲武工務店に残ったままだ。そこからして、おかしな状況と言わざるを得ない。

「一度本人の口から直接話を聞いてみたいものだ」

大地は報告書を机に仕舞うと、デスクのインターホン越しに高野を呼んだ。

「スケジュールを調整して時間を作ってくれ。できるだけ早急に」

数日後、大地は再びミューズシティの現場に来ていた。

今度はちゃんと前もって連絡を入れておいたし、ジャンパーやヘルメット、それから靴も最初から身につけて現場入りした。

実は大地の社用車にはヘルメットや軽量安全靴が常時準備されていて、前日も、取りに戻ればすぐにでも使える状態になっていた。

彼とて曲がりなりにも建設会社の代表を務める人間だ。あまり頻繁に機会があるわけではないが、現場に入りにする必要があるはずにも対応できるだけの備えは、日頃からしている。

あの時、装備がなかったのは当初随行する予定のなかった小嶋だけだった。別段、小嶋と一緒にいなくても困ることのない大地は、事務所に残りを命じたのだが、なぜか彼はそれに猛烈に反発した。そして装備も持たないまま、勝手に責任者を探しに行ってしまったのだ。

案内役の現場監督代行、巽陽南子と共に何ヶ所かのポイントを回り、クリップボードを見ながら工事の進捗状況の説明を受ける。

今日も彼女は作業服にヘルメット着用、安全靴という出立ちで、どう考えても先日の報告書にあった女子校のイメージにはそぐわない。背筋を伸ばし颯爽と歩く後ろ姿に、頭の中であの有名なセーラー服を着せてみた彼は、思わず含み笑いをしてしまった。

どう考えても、仮装あるいは女装としか思えない。

「何か？」

怪訝けげんそうな顔で見つめられたが、まさか自分が思っていることを口にできるはずもなく、彼は笑いをこらえて「いや、何も」と返すのが精一杯だった。

今日のこの現場には異組の関係者が多く入っているとのことで、時折すれ違う職人たちに陽南子が気軽に声をかけている。その様子は監督と作業員というよりも、ご近所仲間が道で出会った時にする挨拶のような感じだ。

「これは、これは。朝倉社長ではないですか」

後ろから突然呼び止められたのは、あらかじめ視察も終わり事務所に引き上げる頃だった。

「稲武社長」

声をかけてきたのは、朝倉建設からこの工事を請け負った稲武工務店の社長だった。

「先日はこちらの不手際があったそうで、申し訳ありませんでしたな」

「不手際？」

「うちの者が、こともあろうに社長の現場の立ち入りを拒否したとかしなかったとか」

最初は何のことだかピンとこなかった大地だったが、それを聞いた陽南子があからさ

まに嫌な顔をしたのを見て、やっと思いだった。

「ああ、あの時のことですか。大したことではないですよ。ところで稲武社長はどこからその話を？」

「あの日すぐに朝倉建設の秘書さんからお叱りの連絡がありましたね。生憎あいにくと私は他の現場に出ていたもので、すぐに対処できませんでしたが」

そう言うと、稲武は大地の側に立つ陽南子に「瞥いちげつをくれた。

「君ももう少し言葉を慎みたまえ。こんなだからいつまで経っても嫁もちの貰もらい手がないんだ」

そのあまりの言い様に、大地は、思わず眉をひそめた。だが、当の本人である陽南子は嫌そうに小さくため息をついただけで、平然としている。

「大きなお世話、と言いたいところですが、こればかりは仕方ありませんよ。私は自分より大きな男性が好みですし、そういう人でないと背格好のバランスがとれませんから。小さい男性だと自分の大きさが恥ずかしくて隣に並べないですからね」

見たところ、稲武の身長は一六〇センチそこそこといったところだろう。明らかに彼女の方が背丈がある。それをさりげなく皮肉る、かなりキツイ反撃だ。

同じように感じたのか、稲武も顔色を変えたが、賢明にも大地の前では何も言わなかった。否、もしかするとと咄嗟とつさに切り返す言葉を思いつかなかったのかもしれない。

このやりとりを聞いていた大地は、首を傾げたくなった。二人は社長と社員という立場のはずなのだが、交わされる会話はあまりにもとげとげしい。

確かに陽南子の揶揄はキツいものだが、それ以前に稲武の発言はセクハラだ。普通の会社なら女性社員から突き上げられ、あまつさえ総スカンを食らってもおかしくない。

「ほら、社長、誰かがお呼びですよ」

首から下げた稲武の携帯が鳴ったのを機に、陽南子が大地に目配せする。

「朝倉社長もお忙しいようですし、私たちはこれで失礼します」

そう一声かけ、くるりと背を向けて歩き始めた陽南子を、慌てて大地が後を追う。稲武が陽南子を憎々しげに見つめていることを、訝しみながら。

「大丈夫か？」

建設中のビルから外に出ると、陽南子は心配そうに問いかける大地に向かって豪快に笑った。

「こんなことは、よくあることですから」

「しかし、ここまでくると、セクハラだけでなくパワハラも含まれる。君もよく耐えているものだな」

大地の言葉に、陽南子は大きく肩を竦めた。

「こういう昔ながらの男社会の中になると、どうしても、ね。仕方がないことです。いちいち相手に腹を立ててたらきりがない」

今でこそ、建設現場にもちらほら女性作業員の姿を見かけるようになったが、やはりまだここは男中心の世界だ。

職人たちの中にも「女のくせに」とか「女だてらに」という目で彼女を見ている者がいることにも気づいている。その筆頭は悲しいかな、自分の祖父なのだから。

今回の仕事でも、源之助は彼女が異組の者として現場に入ることを許さなかった。

だから陽南子は便宜上、稲武工務店の社員としてここにいながら異組を動かしている。彼女が地下足袋やニツカポッカでなく、稲武の作業員たちと同じ作業服を身につけているのはそのためだ。

それに、異組の職人たちとて、彼女に全幅の信頼を寄せているわけではない。体調を崩している親方の代わりとしてではなく、子供の頃から職人たちに可愛がられていた「親方のお孫さん」だから彼女の指示を受け入れてくれるに過ぎないことは充分にわかっていた。

半年近く前、陽南子は稲武工務店を辞めて異組に入りたいと祖父に嘆願した。

この数年というもの、源之助は体調を崩しがちで、無理をして現場に出てはしばしば病院に担ぎ込まれていた。そんな祖父のためにも、できれば自分も組の中で屋台骨を支

えたいと思つたからだ。

元々陽南子は現場に出ることを苦にしない。だから稲武工務店にいても図面を引くより外に出ていることの方が多くくらいだ。

だが、今の彼女が異組に入ることは決して容易いことではない。なぜなら、特にビル工事などで鉄筋を扱うとび職人は、マニュアルどおりにこうすれば良いというものではなく、多くの経験と熟練した技が求められるからだ。その上、普通の建設作業員に比べて高所作業が多いとびは、それだけでも慣れるまでに時間を必要とする職種で、見習いから始めて一人前になるまでには何年もかかるのが普通だ。陽南子は今すでに二十九歳基本から習い始めるには年齢的にもかなり出遅れている。それにいくら監督代行として現場に出ているとはいえ、実際に鉄筋を接いだ経験はまったくなく、そこらにいる素人と大差ないというのが祖父の見解だ。

結局、源之助は最後までこの話に首を縦に振らなかつた。今までどんな我侬もきいてきた、たった一人の可愛い孫娘の願いだが、これだけは承服できなかつたらしい。

そして最終的に祖父が出した答えは、「異組はどこか大手の引き受け先に譲る」という信じられないような結論だつた。

3

視察を終え、現場を後にする大地を見送ると、陽南子はため息をついた。

男社会というのは本当に厄介だ。

祖父はこんな状況になつても、陽南子には絶対に跡を継がせないと言い切つた。

とび職人の世界に女の入る余地はないと。

今回のことにしても、源之助が倒れる前に請け負つた仕事を、今さら断れないという理由で不承不承、陽南子に任せただけだということは、彼女自身が一番よくわかつていた。第一自分は職人たちに信頼されているわけではない。皆と同じ作業さえできないのだから、端から彼らに認めてもらへるはずがなかつた。

地上から出す指示ひとつにつけても、源之助のようにその道を極めた職人ならば、どれだけきつい言葉を投げて、相手から絶対的な信頼と服従を勝ち取る。しかし自分ではとてもそうはいかない。

表面的にはあつても、この現場で職人たちが自分を親方の代理として立ててくれるのは、ひとえに祖父の後ろ盾があるからであり、ほとんどの職人と子供の頃から見知っ

ている仲だからに過ぎない。

さらに、異組の将来に対する考え方でも、祖父と陽南子は真つ向から対立している。彼女は今までどおりに組織を存続させていくためには組の会社化を計り、雇用した若い弟子にもつと安定した給料や待遇を与えて積極的に後継を育てていくべきだと主張したが、昔ながらの流儀に拘る源之助はそれに応じようとはしなかった。

近年、職人たちの高齢化は著しく、異組の職人の平均年齢は五十代半ばにもなっている。若手が思うように育たない状態でこのままいけば、数年のうちに七十代になる職人をはじめとしてリタイアする者も少なからず出てくるだろう。

そうなれば組を構成する人数が激減して大きな仕事を請け負えなくなるのは目に見えているし、祖父にもそれは充分わかっているはずだ。

だからこそ、将来のことも見据えた上で、覚悟を決めて他の建設母体に異組を譲ることを決意したのだろうということは一応理解できる。だが、職人の身分を保証してくれる受け入れ先として稲武工務店の名があがった時には、驚くと同時に失望した。

というのも、もし仮に今彼女が工務店を辞めてごり押しして組に入ったとしても、近い将来異組が稲武に吸収されてしまったら、おそらくその時点で、陽南子は職を失うからだ。

彼女と社長の稲武との関係は良好とは言えないものだ。今、稲武が陽南子の首を切らないのは、異組が、ひいては職人の技が欲しいからに他ならない。そのために源之助との関係を悪化させないように、手元で彼女を飼いついておくとおもうでもない。そして、この状況に甘んじている陽南子自身も、どうにも身動きが取れない状況だ。今、稲武を辞めて他に就職先を探せば、異組を継ぐという野望は完全に潰れる。それにこのまま手を拱こまねいでいるだけでは、いずれ源之助は組を稲武に引き継ぐ手配を始めてしまうだろう。

なんとかそれだけは食い止めたい。

そう思えばこそ、この両者に近く、自分の目が行き届く今の身分を手放すことができなかつた。

陽南子は社員でありながら、稲武の社長にも、そもそも会社自体にも良い印象を持っていない。

確かにここは、中堅どころのゼネコンとして、業界では名が通っている工務店だ。しかし、実際は社長がほとんどのことを一人で勝手に仕切ってしまうワンマン経営で、重要な役職はすべて社長の身内が固めているせいも、数年間内側から見てもどうも内情がはつきりしない。

今の不況のご時勢、そんなに儲かっているとも思えないのに、社長一家の羽振りは良すぎるほどで、どこからそんな利益が出ているのかと首を傾げたくなるのだ。

もちろん、不正の証拠があるわけではないので、彼女にはどうすることもできない。ただ、彼らの有り様を見てみると、どうしても不信感を持たずにはいられなかった。

「考えていても仕方がないか。さあ、仕事仕事」

陽南子は緩めていたヘルメットの顎紐あごひもを締めなおし、軽く両手で自分の頬を叩いて気合を入れた。そして再び現場の喧騒の中に戻っていったのだった。

それからしばらくして、陽南子は古株の職人からある相談を持ちかけられた。

「それ、本当？」

「ああ。なんとなくというか、勘なんだがな。どうにも妙な感じがして。前の現場はもつとビル嵩かさがなかったんだが、これよりは一回り大きいサイズのを使ってたよ」

職人が手にしているのは鉄筋を補強する鋼材だった。彼は、この現場で使われている鉄骨に対して、鋼材が細すぎるように思う、強度は大丈夫なのかと尋ねてきたのだ。

もし誤った資材を使っていたのなら、今までやってきた工事はすべてやり直しとなり、かなりの額の損失が出ることは必至だ。陽南子は急いで事務所に戻り、設計図を机の上に引っ張り出して何度も品番を確認した。

使っているものに間違いはない。

「良かったあ……」

それを見た彼女は安堵のあまりその場にへたり込んだ。

今まで数回、監督の代行として現場に出たが、さほど大きなトラブルに見舞われたことはなかった。だが、もしここでそんなことが起これば、重大な責任問題となる。

事務所に戻るまでの数分間、彼女は最悪の事態を考えていたのだ。

「と、とりあえずは大丈夫みたいね」

取り越し苦労だったと呟きながら、図面をファイルにしまう。

しかし、陽南子の中では、何かが引っかかったままだった。

職人たちは長年現場で培つちかってきた勘と経験を持っている。その彼が「おかしい」と感じたと言うのだ。

図面の指示どおり施工されているのだから問題はないはずだ。

そう思いながらも、彼女はどうしても疑念をそのままにしておくことができなかった。そこで陽南子は、一度このビルを設計した建築士に直接会って確認してみることにした。本来なら社長の稲武に話を通すのが筋だが、面倒を嫌うあの男はこんな根拠のない話など、あっさり握りつぶしそうな気がする。そのため陽南子はひとりで行動を起こすことにした。

問い合わせしてみると、その人物は朝倉建設の設計部署に在るとのことだった。

善は急げとその日の夕方、朝倉建設の会社の前まで職人の車で送ってもらった陽南子は、目的の建物の正面に立ち、あんぐりと口を開けたままそのビルを見上げていた。

「うわっ、デカイ……」

おそらくビルは地上三十階以上あるだろう。上の方は霞かすんだようになっていて、はっきりとした階数を数えることもできなかった。

朝倉建設は、親会社である総合商社朝倉の本社ビルの中にあつた。

ゼネコンは、得てして豪華な社屋を構えることが多いが、ここはまた桁外れに大きく、洒落しやれた造りになっている。

「こんな格好で、中に入れてもらえるんだろうか、私」

自分の服装を見下ろした陽南子は思わず考え込んだ。現場から直接来たので、作業服のままだ。さすがにドタドタする安全靴は軽いスニーカーに履き替えてきたが、どう見ても小奇麗なオフィスビルを訪ねるような格好ではない。

恐る恐る入った広いエントランスは、明るくて開放感があり、まるで高級なホテルのようだった。ただ決定的に違うのは、慌ただしく行き交うビジネスマンの多さと、中央の一番目立つ場所に受付があることくらいだろうか。

「あの、すみません」

カウンターに近づいて、受付で声をかける。

「いらっしやいませ。どちらの会社をお訪ねですか？」

受付の女性は、彼女を見て一瞬驚いたような顔をしたが、すぐにこやかな表情に戻り、用件を訊いてきた。その丁寧な対応に、さすがにこんな大きなビルの顔とも言える受付に座るだけのことはあるなと感心した。美人であることもさることながら、普通ならこんな小汚いなりでどかどか入ってこられたら嫌な顔の一つもしそうなのだが、彼女たちはそんな素振りさえ見せない。これも大会社の行き届いた社員教育の賜物たまものか、と妙に納得させられた。

「あの、朝倉建設の、設計担当の方にお話があるのですが。私、こういう者です」

稲武工務店の名前が入った名刺を渡すと、女性は「少々お待ちください」と言って電話をかけた。

受付に来訪者があること、またその用件を電話口で話している女性が困ったような表情を浮かべたのが見えたが、さすがに電話の向こうの相手が何を言っているのかまでは聞こえない。

「アポイントメントはお取りになっていらっしやいますか？」

送話口を押さえた女性に尋ねられて首を振る。

「いえ。急な用件でしたので」

その旨を伝えたあと、小声で何事かを話していたが、相手に一方的に電話を切られた

らしく、受付の女性も受話器を置いた。

「申し訳ありません。朝倉建設に連絡を入れたところ、担当者は出張中で、その他の設計についてわかる者は全員会議中だそうです。担当者にはアポイントメントをお取りになつてから、再度ご来訪いただけませんかでしょうか、とのことですが」

『体よく断られたな』

完全に門前払いを食らわされたのと、彼女にもなんとなくわかった。

下請け会社の、それも現場の人間がアポイントメントもなく来たところで、すんなり会ってもらえるとは思わなかったが。

「うーん、どうしようか」

受付の女性に礼を言うと、陽南子はしばらくロビーで考え込んだ。

せっかく勢いつけてここまで乗り込んだのに、このまますこすこと尻尾しっぽを巻いて逃げ帰るのも癪しゃくに障る。

その時、不意に背後から名を呼ばれた。

「君、巽さん……巽陽南子さんじゃないか？」

4

秘書の高野と共に取引先から帰社すると、ロビーで見慣れない光景に出くわした。

スーツの集団の中に、一人だけ作業服にスニーカー姿。しかも、長い三つ編みが一本、背中の下がつている。ロビーを行き交う者たちも、少し遠巻きにしながら見ているような感じだ。

このビルには朝倉建設が入っているので作業服姿の人間を全く見ないわけではないが、こんな風に明らかに「現場帰り」の出立ちいでたちでロビーに立ち尽くす者は珍しい。しかも背中に垂らした三つ編みが妙なアクセントになっていて、アンバランスさに思わず目が行ってしまふ。

その、どこかで見た覚えのある後ろ姿に、大地は思わず声をかけてしまった。

振り返った彼女は一瞬驚いた表情でこちらを見たが、すぐに歩み寄ってきた。

そして後ろにいた高野に気づくと軽く会釈えしやくをする。

「朝倉社長、いいところへ。まさに渡りに船だ」

彼女はそう言うと、少し悪戯いたづらっぽい笑みを浮かべた。

「稲武社長と何かあったのか？」

視察の後、彼女には何か問題が起きたらすぐに申し出るように言っておいた。

普通ならば下請けの社員にこんなことを言うべきではないのだが、彼女と稲武のやり取りが妙に彼の心に引つかかっていたのだ。

「いえ、そっちの方は今のところは。あの、それとは全く関係なく、お話ししたいことがあるのですが……ちよつとだけお時間をいただけませんか？ 五分、いえ、三分でもいいので」

彼女は幾分警戒した面持ちで周囲を見回すと、少し声を潜めた。まるで誰かの目を気にするように。

その様子に、大地は後ろにいた高野を振り返ると二、三の問答の後、小声でいくつつか指示をした。そして再び陽南子に顔を向ける。

「わかった。話を聞こう。こちらに来たまえ」

陽南子を通されたのは、このビルの最上階、役員室が並ぶフロアにある豪勢な応接室だった。

「少し待っていてもらえるかな。先に急ぎの用事を済ませてくるから」

大地はそう言い残し、部屋を後にした。

すぐに先ほど大地と一緒にいた男性がコーヒーを運んできたので、陽南子は恐縮しながら頭を下げた。ところが当の本人である大地がなかなか姿を見せない。

出されたコーヒーを口にしながら、陽南子は少し後悔し始めていた。

何の証拠もない話に、多忙な朝倉社長を付き合わせてよかったのだろうか。

それ以前に、もし彼が稲武と同じように面倒を嫌う人だったとしたら、まったくお門違いの相手に問題を持ってきてしまったことになる。

たつぷり一時間は待たされた頃、ようやく応接室に大地が現れた。

窓の外はとつと夕闇を過ぎ、すでに街の照明やネオンが隣りていた。陽南子は高層階からの美しい夜景を見下ろしながら、窓際に佇んでいた。

「お待たせしたね。ちよつと急な電話が何件か入ったせいで遅くなった」

「いえ、こちらこそ。押しかけてしまってすみませんでした」

最後に一度、名残惜しそうに窓の外を眺めると、陽南子はソファへと戻った。

「高所は苦手ではない？ ここまで高くて見晴らしが良いと、中には嫌がる客もいるんだがね」

それを聞いた陽南子は思わず声を出して笑った。

「朝倉社長、それを言ったら現場は務まりませんよ」

「怖くはないのか？」

「全然。ましてやとび職人なんて、作業中は地上より空中にいることの方が多いくらいだから。もつとも私は上にはあげてもらえないけれど」

彼女はそう言うと、苦笑いを浮かべながら肩を竦めた。いつもの笑いとは違う、どこか哀しげな笑みだったことが、大地には気になった。

「それより本題。まずは話を聞いていただけますか？」

陽南子は予め用意するように頼んであった、朝倉建設に保管されているミューズシティ全体の設計図のコピーを大地から受け取り、それをテーブルに広げてある箇所を指し示した。

「現在この部分の工事に取りかかっています。今日、そこで作業をしている職人から質問を受けたのですが……」

その内容と、確認のために図面と照合した経緯などを説明した後に、それでも何か釈然としない自分の思いを話した。

「杞憂だとは思いません。でも、もし方が一にも図面に何らかの問題があった場合、完成してからそれがわかって、かなりの損失を被ることになる。今のうちにできるだけそういった疑念はなくしておいた方が良いと思って」

確かに今の時点ならば、何かあってもすぐに対処できる。もし不備が見つかり、たとえ一時的に工事を止めたとして、金銭的に無傷とはいかないが、工期を数ヶ月も延ばせ

ば復旧できる。だが完成した後に、ましてや住居やテナント、オフィスの入所が始まってから不備が発覚した場合、その損失は会社の存続を揺るがすほどの莫大なものになりかねない。

だが現時点でも会社を動かすためには何か、それなりの理由が必要だった。

「何か根拠になるようなものはないのか？」

大地の問いに、彼女は俯いて首を振った。

「ないです、何も。目に見えて明らかかなものは。ただ、熟練の職人の進言を無視することとは、私にはできない。無理を言っているのは承知しますが、とにかく、もう一度設計図を確認するだけでもやってみてもらえないかと思って。それで何も問題がなければ、こちらでも安心して作業が続けられるので」

たかが職人の戯言と言ってしまうえばそれまでだ。だが、大地は陽南子の言葉に聞き流してしまふことのできない焦思のようなものを感じた。

ミューズシティは、朝倉建設が今まで手がけてきたものの中でもかなり規模が大きく、これまでとは桁違いの資金をつぎ込んでいる。文字どおり社運をかけた一大プロジェクトだ。

だからこそ、疑念など入る余地があつてはならないし、どんな小さなミスも許されない。大地ももちろん、そのことは重々承知していた。

「わかった。一度専門家に設計図をチェックさせよう。工事自体を止めることはできないが、それでいいか？」

その言葉に、俯いていた彼女ははっとしたように顔を上げる。

「あ、ありがとうございます」

陽南子は急いで立ち上がると深々とお辞儀をした。

施工主である朝倉建設の社長の了解が取れたのだから、とりあえずは心安いだ。ここでも軽くあしらわれることを覚悟してただけに、意見を聞き入れてもらえたことが、彼女には何より嬉しかったし、正直ほっとした。

「では、私はこれで。お時間を取らせてしまい、申し訳ありませんでした」

そのままくると踵を返し、ドアの方へと向かった彼女を大地が呼び止めた。

「異さん」

何事かと向き直った彼女は、次の大地の言葉に目を丸くした。

「これから時間があつたら、一緒に食事にも行かないか？」

「え？ あなたとですか？」

「他に誰がいる？」

「でも、お忙しいんじゃないですか？」

「だから先に用事を全部済ませてきた」

実際は秘書の高野と、ちょうど社内にはいた弟に仕事を振り分け、押し付けてきたのだが。「でも……」

陽南子は自分の姿を見下ろした。汚れた作業服にスニーカー。手にはいつも現場に持つていつているデイベック。この格好で、ここに入るだけでも躊躇したのに。

「気にすることはないさ。個室を取ればいい」

この男、本気でそんなことを言っているのか、と疑ってしまう。仮にも大会社の社長が行くような店に、こんな格好で入れてもらええるとは思えなかった。

「それならば、私が場所を指定しても構わないですか？ そこなら一緒に行くから」しばらく考えた後、陽南子は逆に大地を誘い返した。

「どこか良い場所でもあるのか？」

その問いに、彼女は大地がはっとする、あの笑顔でこう答えた。

「ええ。じゃあ、行きませうか。とつておきのお店を紹介しますよ」

彼女に案内された先は、ミューズシティの現場にほど近い、線路のガード下にある屋台だった。

「ご苦労だった。帰りは車を拾うから君は戻ってくれ」

大地は運転手を帰すと、先にのれんをくぐった陽南子の隣に腰を下ろした。

三月とはいえ、まだ夜は冷え込む。目の前で煮えるおでんの湯気にじんわりと温もりを感じながら、隣に座る彼女に目をやった。

「おばちゃん、適当に見繕って。それからビールも」

慣れた様子で注文する彼女を見て、まるで会社帰りに一杯引っかけているオヤジのようだと笑いがこみ上げてくる。

「飲めるクチか？」

「まあ、そこそこには」

「大方酔ってくだを巻いたりしているんだらう」

「失礼な！ 自慢じゃないけど、私、ちょっとやそつとじゃ酔わないですから」

陽南子はそう言うって笑いながら、出された二つのコップにビールを注ぐ。

「今日はありがとうございます」

大地とコップを軽く合わせてから、彼女は中身を半分ほど一気に啣おる。大地もビールで口を湿らせると、出されたおでんに手を伸ばした。

「ビール、お口に合わないですか？」

陽南子がちらをうかがいながら、少し心配そうにしている。

「いや、久しぶりだからな。どうしても付き合いたとワインやシャンパン、ブランデーなんかが多くなるからね。それでも学生の時には缶ビールをよく飲んだんだが」

「うーん、想像できないな、社長が缶ビールを飲んでいる姿なんて」

はんぺんにかじり付きながら、陽南子が笑う。

大地も大根を箸で切ると、熱々を口に運んだ。

「陽南ちゃん、熱燗あつかんをつけようか？」

見れば、屋台の女主人が酒たんぽを用意している。

「いいよ、おばちゃん。今日はビールだけで」

そんな女主人との掛け合いに、彼女がしばしばここに通っていることがうかがえた。

「よく来るのか？」

「時々は。現場の近くだし、飲んで憂さ晴らしでもしないといろいろ溜ためまっちゃうから」

陽南子はそう言うって、空になった自分のコップに手酌てしやくでビールを注いだ。

「それに、こんな格好だとお店に入るのにも気を使うでしょう？ ここは気兼ねせずに立ち寄れるから好きなんですよ。何よりタバコの匂いがしないし」

側に積んであった灰皿に手を伸ばしかけていた大地の手が、それを聞いて止まった。

「タバコは苦手かな？」

「あ、いいですよ、吸っても。ここだと煙が籠こもらないから大丈夫」
それを見た陽南子が慌てて否定する。

「昔から、煙はどれも苦手です。最近はお店でも分煙器が付いているところが多いから助かっていますけど」

「ふうん、それじゃあ……やめておこう」

引っ張り出しにかけていたタバコを戻すと、大地はシガーケースをポケットにしまった。
「でも……」

「いいんだ。そんなに吸いたいわけじゃないから」

「すみません」

陽南子が本当に申し訳なさそうに頭を下げた。

「気にしないでくれ。それより君のお勧めは何かな。もう皿が空になったよ」

「ご馳ちせう走そう様さまでした。今日はありがとうございました」

夜も更け、日付が変わる頃、大地と陽南子は屋台を後にした。

自分が誘ったのだから奢おごるといふ彼女を強引に説き伏せて払いを済ませ、大地は携帯で近くの大通りまでハイヤーを呼ぶ。

「それじゃあ、私はここで失礼します」

そう言って立ち去ろうとする陽南子を、大地は慌てて呼び止めた。

「君はここからどうやって帰るつもりなんだ？」

「え、私ですか？ その現場にトラックを置いてるので」

「でもアルコールを飲んでいるから、乗れないだろう？」

この夜、二人はかなりの量のビールを飲んだ。それでも酔った素振りを見せないところを見ると、彼女が酒に強いというのは本当なのだろう。

日頃からアルコールには強いと自負している大地だが、彼女は同等、いやそれ以上のうわばみかもしれない。

「もちろんです。だからトラックで少し仮眠をとって、酔いを覚ましてから帰ります」
それは聞き捨てならなかった。

夜間は人気がない工事現場で、若い女性が一人きり、車内で仮眠を取るだなんて、信じられないことだ。

「そんな物騒なことをさせられない」

「えっ、何で？ 何か問題でもありますか？」

陽南子は何が悪いのかまったくわからないと言わんばかりに首を傾げた。
それを見た大地は内心ため息をつく。

まったく、彼女には自分が女性だという自覚がなさすぎる。確かにそこらの女たちに比べると色気はないかもしれないが、れっきとした未婚の、うら若き女性なのだ。真夜中に、こんなところをうろうろしていて、何か間違いがあつたりしては取り返しがつかない。

「来なさい。家まで送るから」

「ええっ？ いえ、いいです、遠慮します。ウチ、遠いですから。お気遣いなく……」

「いいから。あんなところに一人置いて帰るなんてできるわけがないだろう、まったく逃げ腰になる陽南子の腕を掴み、大地はずんずんと通りの方へと向かつて歩き出す。

「あ、あのつ、私、明日、車がないと困るんですけど……」

「明日の朝、誰かに送ってもらいなさい。誰もいなくなつたら僕が車を回してやる」

「いえ、そんな滅相もない」

大地が本気だとわかつたのか、彼女は顔を引き曇らせている。

「先に君を送つてから帰るからな」

「でも、ウチ、本当に遠いんです」

この期に及んでまだ抵抗する陽南子を引きずるようにして、彼は大通りに出た。

「構わない。今ここで別れたら、君、こっそり現場に戻るつもりだろう。絶対にダメだからな」

彼は待たせていたハイヤーに彼女を押し込め、さっさと自分も隣に乗り込んだ。

「さて、自宅は？ 場所を言つて」

「いえ、本当に……」

「言うまでここから動かないからね」

下手な小細工は許さないとでも言うように、大地はシートにどっかりと座つてじつとこちらを見ている。

この状況に陽南子は窮した。

彼女が住んでいるのは、異組の事務所も兼ねている祖父の家の二階だ。下町ならではの軒を連ねた近所は昔なじみが多い。夜中に男の人に家の前まで送ってもらつてるところを見られたりしたら、後で何を言われるかわかつたものではない。

ただでさえ、ここのところ周囲がうるさいのに。

「あの、でしたら……そう、駅、駅まで送ってください。ウチ、最寄駅から徒歩三分なんです。この時間ならまだ電車が動いてるんで」

「何でまた」

「あー、非常に申し上げにくいんですが、ご近所の目が……」

大地は天を仰いで嘆息した。

「そうか、すまない、そこまで気が回らなかった。こんな時間に男と二人でいるところ

を見られると差し支えるんだね。君が未婚の若い女性だということを忘れていたよ」
 『いやいや、そんなに若くないし。それにあなた、最初から私のことをそんなふうに考えたことはなかったでしょう?』

と陽南子は思わず心の中で大地に突っ込みを入れる。しかし問題の本質はそこではない。彼女だっていい年をした大人の女なのだから、男友達の一人や二人、付き合があっても誰にも咎められることはない。実際はその逆で、適齢期を過ぎようかというのに向に浮いた話がない自分に、近所の人たちはあれこれと要らぬ世話をやいてくれる。彼女が三十歳を目前にした今、ご近所が総伸人状態と言ってもいいくらいだ。

そんな彼らにこの状況を見られたら「あれはどこ誰だ」とか「何をしている人間か」とか散々探りを入れられて、挙げ句の果てには「それで、結婚はいつなんだ?」と突きまわされるに決まっている。

それが少々鬱陶しいだけだ。

特に今年に入ってから、ご近所どころか、ついにはあの祖父までがいろいろと口を出すようになっており、正直なところ陽南子は頭を抱えていた。

もちろん彼女だって結婚したくないわけではない。

だが、何分にもなかなか条件が厳しい。

例えば、一七五センチもあるこの身長。力仕事のおかげで余分な肉こそついていない

ものの、その分筋肉が盛り上がっていて、とても女らしい身体つきとは言えない。それに現場に出るため、年中日焼けで真っ黒だし、男たちに囲まれているせいで、かっとするとつい、言葉遣いが荒くなってしまう。その上、ついでは何だが、情けないことに家事はまったくできず、この年になっても同居している祖母に任せつきりだ。

そんな自分を鑑みていると、旦那を探すより嫁を探した方が早いのではないかと本気で思ってしまうくらいだった。

「わかった。駅まで送ろう。とにかく真っ直ぐ家に帰りなさい、いいね」

大地はそう言うと、わざわざ大回りをして彼女が使う路線の、一番大きくて発着数の多そうな駅へと車を回してくれた。

「重ね重ね、すみません。あの、ご馳走様でした」

陽南子は先にハイヤーを降りてドアを押さえて立っていた彼に深々と一礼すると、あつさりと深夜の駅に消えていった。

途中で一度だけ振り返り、手を振りながら周囲が立ち止まるほどの大声で「お休みなさい」というあいさつを残して。

大地はその後ろ姿を啞然として見ていた。

彼が勧める高級なレストランを断り、屋台を選んだ女性は初めてだった。それを言うなら、支払いを自分があるとつい張り張られたのも、彼が送ると言ったのを拒まれたのも初

めてかもしれない。

女性に頼られ、エスコートすることに慣れていた大地は、こういつたタイプと付き合っただけがなかった。決して我侷ではないが、自分の価値観に基づいた主張を頑固に貫こうとする、そんな陽南子は、いつも彼に新鮮な驚きをもたらすのだ。

大地は再び車に乗り込むと、軽く目を閉じて、今し方別れたばかりの彼女のことを思い出す。

怒るとひそめられる眉、困った時に伏せられる目、反論する時に必ず指が添えられる唇。耳に残るハスキーな声も、彼女の快活なイメージを損なうことはない。一見女らしさとは無縁のようだが、男の粗雑さとはまた違う所作。

そして、何より彼を惹きつけてやまないのは、内面から輝きを放つような、颯爽とした彼女の笑顔だった。

そんなことを考えながら、大地は我知らず「ふっ」と唇の端を歪めて笑った。
——異陽南子さん。まったく予測不可能な女性だね、君は。

6

寒さの残った三月から一転、四月の声を聞くと、急に春めいた陽気になった。

今年は何度か寒の戻りがあり、開花が遅れた桜は、今ようやくよく見ごろを迎えている。

かねてから交渉を進めていた外国企業との合弁会社設立に向けての調印式を明日に控えていた朝倉本社は、慌ただしいながらも祝賀のムードに包まれていた。

「兄貴も一本どう？」

「いや、いい……やめておく」

タバコを勧めたのは、明日の打ち合わせに訪れていた彼の弟であり、現在この会社の常務でもある朝倉嶺河だ。

「へえ、めずらしいな、ヘビースモーカーのくせに」

「これでも最近少しずつ本数を減らしてるからな」

陽南子と屋台で飲んだ日から、大地は極力喫煙を控えるようになった。

元々、一時はやめていたタバコを再び吸うようになったのは数年前、不慮の事故で妻と息子を亡くした頃からだった。家族がいなくなった自宅では、別段やめる必要もなか